

蜻蛉日記における助動詞

キ・ケリの用法について

加藤 浩 司

序、表現主体の素材・場面意識と表現形式

時枝誠記氏はその言語過程説から言語の存在条件として「(表現)主体」「場面」「素材」の三者を設定していた。そしていわゆる「文体」について、小林英夫氏らの「文体論」を批判して次のように述べた。

一般には、一つの対象は、一般性においても、個別性においても認識されねばならないことは当然であつて、(中略)恐らく、普遍性を離れて、個別性を認識することは不可能であり、その逆も、また成立しないであらう。普遍と個別とは、一つのものの両面と考へなくてはならない。言語においても同様であつて、鷗

外の表現は、日本語として的一般性において成立しつつ、また、他の作家に紛れることのない特性をそなへたものとして成立するものであることも事実である。一般性と個別性とを、別の領域のものとして分つたところに、文体論を設定する根拠が生まれたのであらうが、その理論の根底に、以上見るやうな重大な欠陥を蔵してゐるのである。

漱石の文体とか、西鶴の文体とかいはれることがある。それは、漱石なり西鶴なりの個性的表現を見てゐるのではなからうかといふ疑問が生ずるであらうが、この場合の文体も、私は、伝統的な用法と同様に、文章の類型について云つたものとみるべきであると思ふのである。それらは、漱石や西鶴の文章を、他の作家の文章に対比して、そこに一つの、他とは異なつた類型を見出した時、云はれることである。文体の概念は、文章に対する類型認識の所産であるから、これを広くも、狭くも、また種々な観点から括ることが可能である。漱石の『道草』と『虞美人草』とを対比すると、やはりそこに文体の相違が認められる。しかし、それ

も結局、道草的文体、虞美人草的文体として類型化されたものであることにおいて、口語文体、文語文体などと云はれる時の文体の概念と根本的に相違するものではない。そして、そのやうな文体は、ただ音韻、語彙、語法において成立するものではなく、表現主体が、素材や題材をどのやうにして把握し、どのやうな態度で表現するか、また、表現の場面をどのやうに意識し、それによつて表現をどのやうに調整するかによつて、そこに幾つかの類型が存在することになるのである。そのやうな、表現に対する根本的な態度は、必然的に、音韻や語彙や語法やその他の表現の形式面に顕現して、そこから、宣命体、和漢混淆文体といふやうな名称が生まれて来るのであるが、その場合、表記や語彙が、文体を決定するのではなく、表現の態度や方法が根本であつて、それが、表記や語彙やその他の表現を決定すると見るべきであらう。(傍線加藤、時枝誠記博士著作選Ⅲ『文章研究序説』、昭五二(一九七七)明治書院刊、三八〜三九ページ。なお、引用に際して漢字の字体を通用のものに改めた。以下の引用についても

同じ。また踊り字についても改めたものがある。)

こうした時枝氏の考え方に拠れば、「文体」という用語は、言語表現の類型的な特徴から個別的な特徴まで、つまり、様式から個性までも包含する、極めて広い概念を示すことになる。そしてその「文体」は、「表現主体が、素材や題材をどのやうにして把握し、どのやうな態度で表現するか、また、表現の場面をどのやうに意識し、それによつて表現をどのやうに調節するか」が「音韻や語彙やその他の表現の形式面に顕現し」た結果生ずると考えられているのである。こうした「文体」観は「文体」の語学的研究にとつて極めて有効な理論的基盤となり得るものであり、本稿もこうした「文体」観に則つて考察を展開するものである。

一、本稿の課題

私はかつて、平安時代の物語や日記文学作品の「叙述態度」をそれらの文章の文末詞を調査して推定し分類する試

みを行なった（拙稿 a 「物語の叙述態度——文末詞調査の試み——」、『名古屋大学人文科学研究』一九、平二（一九九〇）・三月）。その際疑問に思ったのは、多くの作品で、過去の事象を叙述していると思われる場合でも、述語部分にキやケリといったいわゆる過去の助動詞が用いられないことが多いという事実であった。また、キは表現主体の直接体験した過去の事象を表わし、逆にケリは伝聞したことなど間接的に知った過去の事象を表わすと言われているが、日記文学作品のように表現主体自身の体験を述べたはずの文章においても、キはそれほど用いられず、むしろケリの方が多く用いられているという事実であった。

こういった疑問を解決するために、私はまずキとケリという助動詞自体の意味・機能を確認しなければならなくなつた。そこで私は、キは「目睹回想」で自分の親しく経験した事柄を語るもの、ケリは「伝承回想」で他よりの伝聞を告げるのに用いるもの、とする細江逸記氏の説（『動詞時制の研究』、昭七（一九三二）泰文堂刊）について、その例外とされてきた漢文訓読系の文献を資料として検討した。その結果、①こうした文献に現われる、表現主体にとって

目撃不可能な遠い過去の事象をキを用いて叙述するという例外的な用法は、ある過去の出来事を本当にあった（宗教的・歴史的）事実として証言的に叙述する場合だけに許された特別な用法であろうと思われ、②発話時の表現主体にとって、過去に生起したと意識される事象を表現する場合、その事象が生起するのをその時点で自分自身が目撃したり明確に意識したという視覚的・感覚的記憶の伴うものは助動詞キを用いて表現し、こうした記憶の伴わないものはケリを用いて表現する、という区別が基本的に当てはまることが推定できた。つまり、やはりキとケリの差異は表現主体が直接体験したか否かに関連することがわかったのである（拙稿 b 「助動詞キ・ケリの機能——最勝王経古点・三宝絵詞・今昔物語集を資料として——」、『日本語論究 2——古典日本語と辞書——』、平四（一九九二）和泉書院刊）。そして同時に、キやケリなどの助動詞の意味・機能を考察するうえで、地の文の用例については資料とする文献が表現主体のどのような意識のもとで叙述されているのか、会話部分の用例についてはその発話が話者のどのような意識のもとでなされているのか、等についての検討が大変重要

であることを感じさせられたのである。

以上の前提に基づき、本稿では、前稿aで扱った平安時代の日記文学作品のうち、地の文で特に助動詞ケリを多く用いている蜻蛉日記を資料として、表現主体が素材や場面などについてどのような意識で叙述しているか等に留意しつつ、この「日記」においてなぜキよりもケリの方が多く用いられているのかを考察したい。

二、方法論の確認

一般に、具体的な話し手・聞き手と状況(すなわち場面)がはっきりしている会話言語の場合と異なり、書記言語においては、手紙など読者が特定されているものを除き、表現主体自身が読者および場面に関するものすべてを仮想しなければならぬ。さらに虚構を交えた文学作品の場合、実際にその文学作品を書記する人物(作者)がそのまま表現主体として叙述する場合よりも、なんらかの仮想的存在として設定された表現主体(物語の語り手とか一人称小説における「私」とか)が叙述を行なう場合の方が多い。そ

うえに叙述される内容である素材自体も表現主体が考え出した虚構を含むものなのである。だから、こうした作品の文章を語学的研究の資料として扱うのは、上述した「文體」の決定に関連する表現主体の素材把握や場面に對する意識、及び表現主体自身に對する意識を、十分に吟味したうえでなくてはならない。

それではそうした表現主体の意識はどのように探求すべきか。これについては以下のごく当たり前の方法しかないであろう。すなわち、

ア①会話言語そのものや、書記言語であっても会話場面の言語表現など、主体・素材・場面が明確に捉えられる条件下での言語表現を資料として、これら三条件の変化と音韻・語彙・語法等形式面の変化との相関を調査する。

②こうした調査の結果から、逆に当該作品の種々の形式面の特徴によって不明なこれらの三条件を推定する。

イ 当該の書記言語作品の文章自体に含まれる、これら三条件の在り方を示唆するような記述内容から推定す

る。

といった方法である。アは他の言語表現を調査した結果を利用する方法、イは問題となる書記言語作品自体から手掛かりを得る方法である。いずれも平凡ながら容易ではない。本稿ではいわゆる過去の助動詞キ・ケリに関する点に限定して考察し、アの方法については従来の古代語文法研究の成果を踏まえたうえで前稿の結果を考察の出発点とした。

三、蜻蛉日記におけるキの用法

最初に助動詞キの用例について考察したい。その前に、この日記の表現主体を作中に描かれている主役女性（つまり道綱母）と同一人物であると見なしでもよいかどうか、確認しておく。

小西甚一氏『日本文芸史Ⅱ』（昭六〇（一九八五）講談社刊）はこの日記の文章が（西欧の文芸批評で言う）「混合人称」の「限定視点」によって叙述されているとしている（同書三二二～三三二ページ、「混合人称の日記」の項

参照）。小西氏の結論は、——①冒頭の一文、「かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、ともかくにも付かで、世に経る人ありけり」で主役女性を第三者として紹介しているし、文中の所々で主役女性が主語として現われる時には三人称で表現されているが、②その反面、表現主体の視点は主役女性の視点と一致した限定視点からなされており、述べられている内容は一人称の叙述と受け取って差し支えない——という二点から得られたものである。

このうち、①の点については、柿本奨氏『蜻蛉日記全注 釈（上）』（昭四一（一九六六）角川書店刊、一四ページ）が「『人』は、作者自身のことを三人称形式で記したものが」（中略、更級日記の例を挙げた後、宇津保物語吹上の上巻の例の）「『人』も話者涼自身のことであるし、本日記にも同様の表現があるから、当時ふつうになされた言い方と思われる」と述べているし、今西祐一郎氏『蜻蛉日記』序跋考（『文学』昭和六二（一九八七）・一〇月号）も序文冒頭の表現を当時の「卑下・謙遜の語法」と捉え、三人称による叙述とは見なししていない。

そもそも、言語表現（特に書記言語）では、発話（執筆）

時の表現主体としての自身と表現される素材としての自身との間に当然「視るもの」と「視られるもの」としての分離があるはずであるし、また、この日記では時間的距離やその他の原因によって「今の自分」から「過去の自分」を自己対象化する場合も考えられるので、西欧の文芸批評で言う何人称であるかはともかく、叙述の際の表現主体の意識としては、やはり主役女性と同一の立場、あるいはその主役女性を対象化するにせよ、それを「過去の自分」として捉える立場からはみでるものではないと考える。(注一)

以上のように基本的には表現主体を主役女性と同一人物であると見なして考察したいと思う。以下、用例の調査・引用は今西祐一郎氏校注の新日本古典文学大系本(『土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記』、平元(一九八九)岩波書店刊)の本文に拠り、文意の解釈については柿本奨氏の『蜻蛉日記全注釈(上)・(下)』(昭四一(一九六六)角川書店刊)及び上村悦子氏の講談社学術文庫本『蜻蛉日記(上)・(中)・(下)全訳注』(昭五三(一九七八)刊)も参照した。本文全体を表現主体の別により主役女性の叙述する地の文、作中人物の発話である会話・心中思惟

(主役女性の心中思惟で「〜と」などで地の文と区別できるものを含む)、及び詠者による韻文部分である和歌の三つに分けた。用例を便宜的な用法別に分類した結果を表一に示す。

「表現主体の直接体験した過去」は前後の文脈などからそれが表現主体である主役女性(地の文の場合)、発話主(会話などの場合)、及び詠者(和歌の場合)の直接体験した過去の事象だと判断されるものであり、それが文脈など

(表一) 蜻蛉日記におけるキの用例(岩波新大系本による)

用法の種類 叙述の種類	用法の種類			
	地の文中	会話等中	和歌中	合計
表現主体の直接体験した過去	八四	二二八	五六	二六八
相手の直接体験の問い掛け		二		二
既述事象の再述	三三三			三三三
論理的に仮定された過去・連語	九	四	七	二〇
直接体験か否か不明	五	一		六
合計	一三二	一三五	六三	三三九

では確認できず不明な場合は「直接体験か否か不明」に分類した。前者のうち地の文の八四例について細かく吟味してみると、それらのうち六七例は、叙述されている事象の時点よりもうひとつ前の過去の時点、言わば「大過去」の事象を叙述する場合に用いられていると言える。例えば、

さて寺へものせし時、とかうとりみだりし物どん、つれづれなるままにしたたむれば、あけくれ取りつかひし物の具なども、又、書きをきたる文などみるに、絶え入る心ちぞする。よはくなり給しとき、戒むこと受け給し日、ある大徳の袈裟をひきかけたりしままに、やがて穢らひにしかば、ものの中よりいまぞ見つけたる。

(上、七一ページ)

という例など、傍線部のキの用いられている述部の出来事は主役女性の母親が亡くなる以前のことであり、その遺品を整理している時点、つまり表現主体が「今」と表現している時点よりもさらに過去に当たるのである。こうした「大過去」の用例は、単に「表現主体の直接体験した過去」

を表わすだけでなく、叙述している事象の時点よりもさらに過去であることを示すために用いられているのだと考えられる。

地の文の中で「大過去」を表わすもの以外の用例一七例は、

その泉川もわたらで、橋寺といふところにとまりぬ。西のときばかりに下りてやすみたれば、旅籠所とおぼしき方より、切り大根、柚の汁してあへしらひて、まづ出だしたり。かかる旅だちたるわざどもをしたりしこそ、あやしう忘れがたう、をかしかりしか。

(上、八九ページ)

のように、表現主体が自らの叙述している事象を執筆時にも記憶にはっきりと残っていることとして述べたものと考えられる(注二)。これらの用例は、引用した例のように、表現主体自身の行爲や感覚に関するものがすべてであり、執筆時における表現主体の特に明確な記憶を反映するものだと思われる。

このように、蜻蛉日記の地の文で表現主体が自身の直接体験した事象をキを用いて述べるのは、単にそれが自身の過去の体験だからではなく、事象の相対的な前後関係を示す場合や、執筆時にも残る鮮明な記憶を示す場合である。そしてたとえ表現主体自身の過去の体験であっても、そのほとんどはキもケリも付かない、いわゆる「現在形」の述部によって表現されている。

この点について、拙稿aでは、表現主体が発話や叙述の場面を「現在」として強く意識している際にはキやケリを用いるが、表現主体が発話・叙述の場面意識を失い自己の表現する事象世界に視点を移動した場合には、もはやそれらの事象を「過去」とは意識せず、キやケリは用いないのだと考えていた。しかし、拙稿b以降は、古代語では漢文のように形態上はいわゆる時制の区別がなく、キやケリは時制上の過去とは別の意味——明確な記憶とか追認とか——を表わしていたのではないかとする立場に傾いている。ただし一般の会話では表現主体自身の直接体験した過去の事象をキを多用して表現するのが普通である。この日記でも、次の例など、主役女性にとって少なくとも十二〜三

年前の出来事をほとんどキの付いた述部によって述べている。

「そよや、さる事ありきかし。故陽成院の御のちぞかし。宰相さいしやうなくなりてまだ服かみのうちに、例れいのさやうのここと聞ききすぐされぬ心にて、なにくれとありしほどに、さありしことぞ。人はまづその心ばへにて、ことにいまめかしうもあらぬうちに齡としなどもあうよりにたべければ、女はさらんとも思おもはずやありけん。されど返かへりごとなどすめりしほどに、みづからふたたび許ゆるなどものして、いかでにかあらん、単衣ひとへぎのかぎりなんとりてものしたりしことどももありしかど、わすれにけり。さていかがありけん、

せきこえてたびねなりつるくさまくらかりそめに
はたおもほえぬかな

とかいひやり給ふめりし、なほもありしかば、返かへり、
ことごとしうもあらざりき。

おぼつかなわれにもあらぬくさまくら又またこそしら
ねかかるとびねは

とぞありしを、『たびかさなりたるぞあやしき。などもるとんに』とてわらひてき。(中略)「させんかし」などいひなりて、(下、一七六〜一七八ページ)

これは近侍する女房らしき人物を相手に主役女性が話している部分である。対して地の文ではこれより後年に当たる出来事を

春うちすぎて夏ごろ、宿直がちになるこちするに、つとめて、一日ありて暮るればまいりなどするをあやしうと思ふに、ひぐらしの初声きこえたり。いとあはれとおどろかれて、

あやしくもよるのゆくゑをしらぬかなけふひぐらしのこゑはきけどん

といふに、出でがたかりけんかし。(上、六六ページ)

というように、ほとんどキを用いず述べているのである。

それではなぜ地の文においてはキがあまり用いられていないのだろうか。第一に考えられるのは、一般的な会話場面と、一つの書記言語作品執筆という場面との、表現主体

の場面意識の違いであろう。つまり、個々をとってみれば特に脈絡もないような普通の会話においては、ある事象が表現主体の直接体験した出来事であるか否かはやはりその都度キを用いて表現しなければ示せないと感じられることが多いであろう。しかしあるまとまりをもった言語作品においては、言わば「叙述の大枠」と言った筆者と読者との共通の約束が作品の叙述全体を支配していることがある。

例えば物語における「昔よりありけり」・「とぞ語り伝へたる」という冒頭・結末の常套的表現など、その作品の叙述全体が伝聞譚であることを枠として示している。こうした作品内部の叙述において、たとえ伝聞を示す指標(例えばケリとか終止形接続のナリ)が付いていない文が混じっていたとしても、全体として伝聞譚としての枠が示されている以上、読者がそうした文で表現されている事象が伝聞したものであるか否かについて誤解することはなかったであろう(注三)。こうした「叙述の大枠」意識がこの蜻蛉日記の地の文の表現主体にも存在していて不思議はないはずである。

そこでまず、二節のイの方法により、この作品自体の記

述からこうした意識を窺ってみる。

(前略) 人にもあらぬ身のうへまで書き日記してめづらしきさまにもありなん、天下の人の品たかきやと問はんためしにもせよかし、とおぼゆるも、

(上、三九ページ)

そのころを、ただこの事にてすぎぬ。身の上をのみする日記には入るまじきことなれども、かなしとおもひいりしも誰ならねば、しるしをくなり。

(中、九八ページ)

前者は作品冒頭のいわゆる「序」の一部である。冒頭から、表現主体はこの作品の執筆意図が「人にもあらぬ身のうへまで書き日記して」云々であるという点を表明しているのである。だから読者にとって、この作品で叙述される出来事が表現主体の「身のうへ」に関する事、そのほとんどが表現主体自身の体験であるだろうことは既に自明なのである。そしてこうした約束は後者の中巻の記述においても

確認されている。もうひとつ、これが「日記」であるという表現主体の表明も重要である。柿本燹氏の『全注釈(上)』の一六ページには「『日記す』は単に記録する意味だけではなく、月日の順に、月日を記しつつ事実を記録する意。」という注釈が示されている。当時の「日記」の示していた概念については別に詳しく検討する必要があるが、蜻蛉日記作者の意識に限って言えば、現に存在するこの蜻蛉日記自体の在り方を見ても窺われるように、「月日の順に(つまり出来事の生起の順に)」「事実(自身の体験した出来事)を記録したもの」を「日記」と考えていたことは認めてよいであろう。結局、表現主体は「自身の過去の体験を、その生起の順序に従って述べていく」ことを読者に表明し、それを「大粹」としてこの「日記」を叙述したのであることが推定できる。

こうした「大粹」意識を前提とすれば、なぜ地の文においてキがあまり用いられていないかは次のように説明できる。つまり、あらかじめこの作品が「身のうへまで書き日記」したものであると冒頭で表明した以上、叙述される事象は(前後の文脈さえ参照すれば)表現主体自身が過去に

体験したものであることは明らかなので、「生起の順序」通りの事象については特にキを用いて叙述する必要を感じなかったのである。ただし、事象の生起の順序と叙述の順序が転倒する「大過去」の場合や、事象の相対的な前後を示す必要のある場合にはキを用いる必要がある、また執筆時の表現主体にとってその事象の記憶が明確に保持されていることを表明する場合にはキを用いたわけである。

以下、残された用法について説明する。「相手の直接体験の問い掛け」は、

かへりて「さありし」など語れば、^{カタ}「食ひつぶしつべ
き心ちこそすれ」とやいはざりし」とて、いとをかし
と思ひけり。^{おも}（上、七九ページ）

のように、相手が直接体験したと考えられる事象について尋ねるものであり、用例は会話部分に二例のみ見られた。

次の「既述事象の再述」は、表現主体が既に一度叙述した事象について再び言及する場合にキを用いて述べるもので、この日記の場合この用例はすべて「表現主体の直接体

験した過去」と重なるものであった。

「論理的に仮定された過去・連語」は、

「あはれ」など、しげく書きて、
ふく風につけてもとはむささがにのかよひしみち
はそらにたゆとん^ん（上、五一ページ）

のように、表現主体が喩え話などで仮定した過去の事象を述べるものや、「来し方」「ありしより」など慣用的な表現として連語化していると思われるものである。これらの中にも「表現主体の直接体験した過去」と重なるものが地の文中九例すべて、会話中二例、和歌中一例、合計二十例中十二例あった。残り八例は重ならないものの、元来仮定の話や慣用句などについては実際の事象と同じように「表現主体の直接体験の過去」であるか否かは問えるものではないので、これを反例としなくてもよいであろう。

以上見たように、会話などと和歌における助動詞キの用例についてはほぼ表現主体の直接体験した過去の事象を表わしていた。地の文においては、直接体験した事象のなか

でも執筆時において特に鮮明な記憶のある事象か、事象の相対的な前後関係を示す必要がある場合（大過去など）にだけキが用いられていた。これは冒頭から「日記」として表現主体自身の体験を月日の順序に従って書いてゆくという叙述の大枠を讀者に示し、それを自明の前提として意識していたためではないかと考えられた。すなわちこうした大枠意識のもとでは、生起の順序通りに叙述している事象についてはいちいちキを用いなくともそれが表現主体自身の直接体験した事象であることが明らかなので、それらすべてにキを用いる必要を感じなかったからであると思われるのである。

四、蜻蛉日記におけるケリの用法（一）

さて、次に助動詞ケリの用例について検討したい。キの場合と同様に叙述の種類ごとに分け、便宜的な用法別に分類した結果を表二に示す。

最初の「追認回想」は、

合 計	用法の種類		追認回想	詠嘆的再認回想	解說的再認回想	自身に関する婉曲的表現	推定過去	伝聞過去
	叙述の種類	地の文中						
二二三	三四	一三	九五	一三	九五	六	一五	七〇
一〇九	六五	一	三	一	三	一五	五	二〇
五六	四〇	二	八	二	八	一	一	四
三九八	一三九	一六	一〇六	二	一〇六	二二	二二	九四

（表二）蜻蛉日記におけるケリの用例（岩波新大系本による）

めづらかにあやしと思へど、つれなしをつくりわたるに、夜は世界の車のこゑに胸うちつぶれつつ、ときどきは寝入りて、明けにけるはと思ふにぞ、ましてあさましき。

（中、一一〇～一一一ページ）

のように、表現主体がある事象の生起に遅れて（発話時になつて）気がついたということを示すものである。これに

は

年かへりて、なでうこともなし。人の心のことなるこ
 となき時は、よろづをひらかにぞありける。

(上、六五ページ)

のように、「気づき」とは言っても、表現主体の現在の反省の結果、あることに思い至ったというものもある。それらと違いもはや「気づき」とは言えないものが次の「詠嘆的再認回想」である。

「あなさん。雪はつかしき霜かな」と、口おほいしつ
 つ、かかる身をたのむべかめる人どもの、うちきこえ
 ごち、ただならずなんおぼえける。(中、一六六ページ)

上記の例など、表現主体自身、その時点にも「ただならず」「おぼえ」たはずだと思われるので、叙述している時点になつて「気づいた」わけではないであろう。そのためこの

ようなケリの用法は、以前の自身の行為や感情を現在の意識の内に思い返し、再認識していることを示すとすべきであろう。こういった用例には多少なりとも「詠嘆」のニュアンスを有するものが多い。それは自身の感情などを現在の意識に蘇らせるところなどから生ずるのであるうと思われる。

また、追認回想の中には次のような例がある。

いかにせん、誰ならん、供なる人見知るべき物にもこそあれ、あないみじと思ふほどに、馬にのりたる物あまた、車二三ひき続きてののしりて来。「若狭の守の車なりけり」といふ。(中、一一一ページ)

「若狭の守の車なりけり」と言った発話者にとってそう気づいたという発言が、そのまま聞き手に対してそれが「若狭の守の車」であることを知らせる発言にもなっている。同じ「再認識」でも、こうした聞き手に対する説明・解説といった機能が色濃く感じられるのが次の「解説的再認回想」である。

あくれば五日のあか月に、せうとなる人ほかより来て、
 「いづら、今日の菖蒲は、などかおそうはつかうまつ
 る。夜しつるこそよけれ」などいふにおどろきて、
 菖蒲ふくなれば、みな人もおきて格子はなちなどすれ
 ば、「しばし格子はなまいりそ。たゆくかまへてせん。
 御覽せんにもとてなりけり」などいへど、みなおきは
 てぬれば、事をこなひてふかす。

(下、二二四～二二五ページ)

ここで「御覽せんにもとてなりけり」という「せうと」の
 発言は、自身の「しばし格子はなまいりそ」という直前の
 発言の意図を解説したものであり、「ご覧になるにも、そ
 のほうがよいと思つたからなのだ」(柿本氏『全注釈』下
 巻一八八ページ、上村氏『全訳注』下巻二五一ページもほ
 ぼ同じ)といった解釈が適当であろう。つまり、発話者が
 自身の意図を「さっきはうだったのだ」と第三者のように
 気がついてみせることで、聞き手に対して説明・解説する
 という表現形式をとっているのである。こうした例は和歌
 にも見られる。

大夫、そばのみちのうちまじりたる枝につけて、例
 のところにやる。

なつやまのこのした露のふかければかつぞなげき
 のいろもえにける (下、一九四ページ)

「夏山は、木が繁つて木の下露が深いので、緑の繁りの一
 方、木がこんなに燃えるような紅葉をするようになりまし
 た」(柿本氏『全注釈』下巻八八ページ)と詠者自身が気
 づいたポーズをとっているものの、実は読み手に対して
 「あなたを恋う涙がしきりなので、嘆きもえさかかって、
 おもてに現れるようになりました」(同前)と訴えること
 の方が主となっている。

従来、ケリという助動詞に「説明」「解説」というニュ
 アンスを認める場合、

普通これ(ケリのこと、加藤注)は「き」と共に過去
 の助動詞とよばれてゐるけれども、実はむしろ完了的
 な意味を表はすと身得ることは春日政治博士(「金光
 明最勝王経古点の国語学的研究」)などによつて説か

れる如くである。「き」が、過去の事象をそれとして主観的に回想する態度を表はすに對して、「けり」は、むしろ過去の（あるいは過去からの）事象を、ある程度客観視して、これを常に現在の關聯といふ立場においてながめようとする態度を示すと言つてもよからう。それが、ある事柄を、前からさうであつたのにならう。始めて気づいた、といふ形で述べることにもなるのであつて、そこに現在の感動がこめられるのであつた。要するに「けり」には、このやうな解説のないし説明的な叙述の態度を著しく認めることが出来ると思はれる。

（傍線加藤、注四）

のように、ケリに「過去の事象を、ある程度客観視して、これを常に現在の關聯といふ立場においてながめようとする態度」を認め、説明してきた。しかし、上記の「解説的再認回想」の用例から考えると、ケリに「気づき」つまり「追認回想」という意味・機能さえ認めれば、発話者の気づきの表現即聞き手への報告・説明という場面の介在によつて、直接、説明・解説のニュアンスが生ずることにな

る。この点、ケリの意味・機能を考察する上で、注意せねばならないと思われる。

また、一種の追認回想であるが、発話者自身に関わる事象を婉曲的に述べるために「気づき」のニュアンスを含ませていると思われるものがあつた。それが「自身に関する婉曲的表現」である。例えば、

今日は廿四日、雨の脚いとどかにてあはれなり。夕
つけていとめづらしき文あり。「いとをそろしきけし
きにおちてなん、日ごろへにける」などぞある。返り
ごとなし。（中、一三二一〜一三三三ページ）

「いとへにける」は「とても近寄りたいたい様子に恐れをなして、大分日を過してしまつた」（柿本氏『全注釈』上巻四〇三ページ）という意味であろう。単に「日ごろへぬる」では「今気づいてみたら」というニュアンスがなくなり、確信犯であることを自ら認めているように受け取られるからであろうか。地の文でも、

「下交^{したか}ひどん^もにかうぞ書きたりけるは、いかなる心ばへ
にかありけん、神ぞ^{かみ}しるらんかし。

しるたへのころもはかみにゆづりてむへだてぬ中
にかへしなすべく (下、二二四ページ)

のように、ケムによる婉曲的表現(注五)と共に用いてある例など、過去の表現主体自身の行為や心境を、第三者のそれについて今はじめて気づいて述べているかのように表現している。自身の当時の心境を述べるのにそれが夫婦の情愛に関するものである場合などが多く、読者に対する気兼ねなどの意識が生じて、そうした心境を抱いていた自身のことをわざと今の自分の意識とは無関係の第三者のものであるかのように表現するのである。この時のケリは、過去の自身の行為や心情を再認識しているのだが、そうした過去の自身の行為や心情を現在では快く思わず、同感による表現主体としての詠嘆性は含まれないようであり、「詠嘆的再認回想」とは異なる。

以上の「追認回想」「詠嘆的再認回想」「解説的再認回想」「自身に関する婉曲的表現」と考えられるケリは、いずれ

も追認——いわゆる「気づき」——をその基盤としているように思われる。表現主体が発話時の意識において初めてある過去の事象に気がつくということは、それが現在にも継続している事象であるか、その事象の結果なり影響なりが現在にまで残されているか、であろう。そこから、ケリが「過去から動作が継続して現在に存在することを表す」(注六)とされる場合が多くなるのであり、必ずしも「過去から動作が継続して現在に存在することを表す」ことが原義だと考えなくともよいだろう。例えば、発話時には既に存在していない過去の事象でも、表現主体が自身の直接体験した事象を思い出し、発話時の意識において改めて新しい意味や価値を見出したものについて、そういう点に「気づいた」という意識から、ケリで表現している用例(上掲の「よろづおいらかにぞありける」など)もあるからである。

これに対して、第一節で見たキによる回想表現は、過去の事象をその生起の時点で確認し、自身の明確な記憶として保持していることを表明するものであると思われる。キは一夜以前の過去の事象を表わすのにしか用いられず、そ

れより近い過去の事象はツなどを用いて表わすようである（注七）が、これも、確認した事象が長時間の睡眠・覚醒を経てなお明確な記憶として保持されてはじめてキで表現できるようになることからくるのではなからうか。

五、蜻蛉日記におけるケリの用法（二）

次の推定過去は

心のどかに暮らす日、はかなきこといひいひのはてに、われも人もあしういひなりて、うち怨^{あむ}じて出づるにありぬ。端^はの方にあゆみ出^いでて、おさなき人をよび出^いでて、「われはいまは来^こじとす」などいひをきて出^いでにけるすなはち、はひ入りて、をどろをどろしう泣^なく。「こはなぞ、こはなぞ」といへど、いらへもせで、論^{ろん}なうさやうにぞあらんとおしは^をからるれど、人の聞^きかむもうたてものぐるを^はしければ、（以下略、上、八〇〜八一ページ）

のごとき例である。表現主体である道綱母自身は兼家が道綱に捨てぜりふを残して出ていったところを目撃してはいないのであるが、直後の道綱の様子から「論なうさやうにぞあらん」と推定したのである。これも現在に残されているある過去の事象の結果や影響から、逆にその事象の存在を推定したのであるから、一種の追認とできるかもしれない。ただし、こうして推定された過去はあくまで表現主体自身にとって推定されたものに過ぎず、一度自身が体験（認識）した事象を回想しているわけではないので、「推定過去」とする。

次の伝聞過去は表現主体自身が目撃したのではなく、他人から聞いて知った過去の事象を述べる用法である。小西甚一氏が『日本文芸史Ⅱ』（昭六〇（一九八五）講談社刊）で「まだ和文章創期の『土佐日記』や『蜻蛉日記』は、文章としての生硬さや未熟さが眼立つと共に、叙述の技法も単純であり、作中事件はすべて述主の観察を通じて把握される。たまたま述主が観察できないような事実のときには、他人からその事実を伝え聞いたという形で処理している（同書三三三ページ）」と述べているのは、この伝聞過去の

ケリの用例のことを指していると思われる。この用例の典型的なものには小西氏が同書三四一ページの注で指摘している「養女を迎えるための交渉場面」(岩波新大系本では一七八〜一七九ページ)があるが、ここではまず会話の用例を挙げて考察したい。

さて明^あけぬれば、大夫、「何^{なに}事^{こと}によりてにかありけん
と、まいりて聞^きかん」とてもす。「よべはなやみた
まふことなんありける。『にはかにいとくるしかりし
かばなん、え物せずなりにし』となん、のたまひつる」
といふしもぞ、聞^きかでぞおいらかにあるべかりけると
ぞおぼえたる。
(中、一五八ページ)

「大夫」道綱の会話の「よべはなやみたまふことなんありける」という部分が「伝聞過去」の用例である。この表現も、昨夜の兼家の発病を道綱が翌朝になって初めて知ったという点では一種の追認である。そしてそれが同時に聞き手である道綱母への説明でもあると受け取れる。ただし、それを知ったのが自らの回想や推定でなく他人からの伝聞

であることが明らかである。逆に文脈からそうした事情がわからなければ、ケリという助動詞が用いられているだけで「伝聞過去」だとは断定しにくい(注八)。地の文でも、

われは物^{もの}もおぼえねば、知^しりも知られず、人^{ひと}ぞあひて
「しかじかなんものしたまひつる」と語^{かた}れば、うち泣^な
きて、穢^けらひも忌^いむまじきさまにありければ、「いと
便^びなかるべし」などものして、立^たちながらん。その
ほどのありさまはしも、いとあはれに心ざしあるやう
に見えけり。
(上、六八〜六九ページ)

などはわかりやすいが、

町^{まち}の小路^{こうち}わたりかるとまいりたれば、うべなく「おは
します」といひけり。まづ硯^{すずり}こひて、かく書^かきて入^いれ
たり。

きみがこのまちのみなみにとみにおそきはるには
いまぞたづねまいれる

とて、もろとん^もに出^いでたまひにけり。

(上、六五ページ)

などは、従来本文の乱れもあって、解釈が種々別れてきた箇所(注九)である。ここは「伝聞過去」と見て、兼家だけが出かけ、道綱母は後にこの出来事を兼家から聞いたのだと考えると、この箇所のケリの用例の説明が容易になる。

このように、「伝聞過去」の用法だと考えられるものも、ケリが用いられているだけで伝聞とわかるわけではなく、単にそのケリで叙述されている事象が表現主体にとって直接目撃したり確認したりしたのではなく、後になって間接的に知ったものであることが示されているだけに過ぎない。そして、表現主体がどのようにしてそれを知ったかについて——伝聞か、推定か、現在もその事象が継続しておりそれに今気がついたのか——は、文脈から判断されるだけなのであろう。

結、蜻蛉日記でケリがキよりも多用された理由

以上見たように、キには過去の事象の明確な記憶の保持

ケリには過去の事象の間接的な追認という基本的な意味・機能がうかがわれた。そこで蜻蛉日記においてケリがキよりも多用されている理由として考えられるものに以下のようなものがある。

第一に、これが表現主体にとって遠い過去の体験を述べたものであることである。

(前略) 人にもあらぬ身のうへまで書き日記してめづらしきさまにもありなん、天下の人の品たかきやと問はんためしにもせよかし、とおぼゆるも、すぎにし年月ととごろのこともおぼつかなかりければ、さてもありぬべきことなんおほかりける。(上、三九ページ)

これは「序」の後半であるが、ここで表現主体はこれから書いてある出来事が「おぼつかな」い記憶に拠ったものであることを表明している。そして、上巻の所々には、

見れば紙なども例のやうにもあらず、いたらぬところなしと聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆるまであ

しければ、いとぞあやしき。ありけることは、(和歌略)とばかりぞある。(上、四〇ページ)

のように、どう考えても自身で見たはずの兼家からの最初の和歌を「ありけることは」と表現したり、

秋つかたになりにけり。添へたる文に、「心さかしら
ついたるやうに見えつるうさになん、念じつれど、い
かなるにかあらん、

しかのねもきこえぬ里にすみながらあやしくあは
ぬめをもみるかな

とあるかへりごと、(以下略、上、四一ページ)

のように、当時の季節や暦日をケリで表現したものはある。これらは「解説的再認回想」としたが、こうした表現には、記憶にはなかったけれども手元に残されていた兼家の和歌を見直してみても改めて知り、「(今見ると)書いてあったことは」と説明する意識、あるいは「しかのねも」という和歌の表現からこの和歌のやり取りが「秋つかた」であったのだと改めて思い出して説明しておこうとする意識、など

を想定すると、なぜケリを用いたかがより容易に説明できるであろう(注十)。

ただし、中巻の半ば及び下巻以降については、執筆時期と描かれる出来事の時間的距離は短くなっているはずであるが、下巻以降にも表現主体自身の行為をケリによって述べたものが多い。

この月七日になりにけり。今日ぞ「これ縫ひて。つつ
しむことありてなん」とある。めづらしげもなければ、
「給はりぬ」など、つれなうものしけり。昼つ方より、
雨のどかにはじめたり。(下、一八六―一八七ページ)

こうした例は第一の理由では説明できない。これに対して、第二の理由と考えられるのは表現主体の対読者意識である。先にキの用例の分析の際に引用したが、道綱母が、兼家が別の女性に女の子を生ませた経緯を近侍の女房らしき人物にキを多用して述べていたことを思い出していたきたい。それは下巻の「養女を迎える」段の一節であり、そこで道綱母が「そよや、さる事ありきかし」以下述べている出来

事は、少なくとも十二、三年前のことである。それなのにそこではほとんどの文が助動詞キによって述べられていた。地の文では執筆時に近い過去の出来事であってもケリを多用して述べるのに比べて、これは明らかに異質な述べ方である。

そこでこうした用例から、キとケリのもう一つの差異が推定されてくる。道綱母が近侍の女房と考えられる相手に向かつてキで述べているのは、聞き手が親しく自らに仕える女房であり、自らの体験を明確な記憶を有するものとしてキで述べることに何ら気兼ねがなかったからではないか。つまり、キを用いて述べる表現は、あらわに自身の直接体験した出来事を述べているという姿勢を示してしまう。そうした表現は、この日記のように叙述の中心が自身の夫婦生活に関することである場合、ある特定の読者にせよ、人の眼に触れることを考慮すると、そのまま採用することがためらわれたことが考えられる。

偶然にもこの日記を書き始めた時、表現主体としての作者は素材としての過去の自分自身を十分突き放して対象化できるだけの時間的距離を与えられていた。自身の直接体

験した出来事ではあっても、それは記憶の曖昧なものとなっていた。そこで表現主体としての作者は、過去の自身の体験を、あるいは心境までも、現在も自分が保持している記憶としてでなく、叙述しながら読者と共に再認識してゆく――再認識しながら読者に解説してゆく――出来事として、ケリを用いて表現することがごく自然にできた。そしてその方法は、自己を対象化して捉える意識の定着によって、中・下巻になって叙述する事象と執筆時期との距離が短くなくても失われなかった。むしろ、時間的距離が短くなったために、自然になされていたケリによる再認識・解説の表現を婉曲的表現として転用するようになってきた。つまり、地の文で近い過去の出来事でもケリを用いて述べるのは、それがつい最近の自身の体験・心境であるところから、読者に対する気兼ねをより強く生じ、はっきり自己の記憶にあることとして述べず、婉曲的に、過去の自分または描かれていた自分を第三者であるかのように突き放して扱い、素材としての自身の立場ではなく、読者に寄り添った立場から解説的に述べようとしているからではないかと考えられるのである。

以上考察してきたように、地の文で自身の直接体験した
 事象をケリによって表現する場合も、このような表現主体
 の叙述意識を背景として捉えれば、会話等に見られた一般
 的（と考えられる）用法とほぼ同様であり、表現主体の叙
 述意識としては、「物語」として叙述するとかではなく、
 やはり自身の体験談を叙述しているという意識だったと考
 えることができる。そしてこうした自身の体験の回想（体
 験談）でも、助動詞キよりケリのほうを多く用いることが
 あるということが決して不思議ではなく、ごく普通の叙述
 方法であった可能性を指摘しておきたい（注十一）。（了）

注

一、この点、此島正年氏『国語助動詞の研究——体系と歴史——』

（昭四八（一九七三）桜楓社刊）が

蜻蛉日記は、発端が

かくありしときすぎて、世の中にいとものはかなく、

ともかくにもつかで、世にふる人ありけり。

のように物語と同じ伝承的態度で始まり、文中でもほぼ
 「けり」で終始している。（同書二二七―二二八ページ）
 とすべてを「物語と同じ伝承的態度」で割り切ろうとするの
 には従えない。

二、地の文のキの用例に「大過去」的なものと執筆時の記憶を示
 す両者が存在することについては、伊藤博氏「蜻蛉日記の回
 想表現」『平安文学研究』第四六輯、昭四六（一九七二）・
 六月）及び糸井通浩氏「王朝女流日記の表現機構——その視
 点と過去・完了の助動詞——」（『国語と国文学』昭六二（一
 九八七）・一月）を参照。ただし、両氏は助動詞キ・ケリ・
 ケムなど「過去」を表わすとされる助動詞を用いた叙述を
 「作者が、作中時点からはなれて、執筆時点で、その作中時
 点を回想しながら、自己の感想をもち出す表現」（伊藤氏）「発
 話時を基点とする過去」（糸井氏）か「作者が、述べている
 ことからの時点を現在として、その時点以前の場面・事件を
 回想する表現」（伊藤氏）「素材時を起点とする過去認識」
 （糸井氏）かで区別しており、こうした助動詞の用いられな
 い叙述をいわゆる「歴史的現在」として扱っている点で、私
 見と異なる。例えば糸井氏は

申の時ばかりにもものせしを、火ともすほどになりけり。

(同氏論文一一五ページ)

七三)笠間書院刊)の「蜻蛉日記の文章——婉曲的用法——」を参照。

という例文を後者の例として示しているが、助動詞キは「昨夜以前」の事象を表わすのに用いられるだけで、同日中の事象について用いられた例はなく(鈴木泰氏「古文における六

六、春日政治氏『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』(昭一七(一九四二)岩波書店刊、昭四四(一九六九)勉誠社再刊)下二四四ページ。

つの中の助動詞』『国文法講座』 古典解釈と文法——活用語』、昭六二(一九八七)明治書院刊所収)、この例の「もの

七、注二に挙げた鈴木泰氏の「古文における六つの時の助動詞」を参照。

せし」も「素材時を起点とする過去認識」ではなく、執筆時のそれとしてよいと思う。私は「過去」の助動詞が用いられない叙述についてもすべて執筆時の時点から述べたものであり、こうした違いは相対的な事象の生成時の差——過去が大過去か——だと考える。そして単なる過去でこうした助動詞が用いられないのは、こうした助動詞の機能が「単なる過去」を表わすためではないからだと考える。

八、吉岡曠氏「源氏物語における『けり』の用法・一」(『学習院大学文学部研究年報』第三輯、昭五一(一九七六))では「気づき・確認の用法と伝聞回想の用法」とをニュアンスの少しずつ異なる幾つかのケリの用例で連続させようと試みている。

九、柿本氏『全注釈』上巻一三二〜一三四ページ。上村氏『全訳注』上巻一四一〜一四三ページ参照。

三、この点については次の拙稿で論じたことがある。「古代語の文章における『視点』と『体験性』——和泉式部日記におけるキとケリの使用を例として——」(『名古屋大学国語国文学』第七二号、平五(一九九三)・七月)

四、阪倉篤義氏「竹取物語における『文体』の問題」(『国語国文』昭三一(一九五六)・一月)より引用。

十、門出順子氏「蜻蛉日記上巻の成立に関して——『日記』及び『けり』表現の問題から——」(立教大学『日本文学』三七、昭五一(一九七六))は、上巻の日付・季節等に詠草から割り出されたものが多いことを指摘し、多くの記事が歌反古類をもとにして整理・記述されたとする。

五、根来司氏『平安女流文学の文章の研究統編』(昭四八(一九

十一、拙稿aでは平安時代の物語・日記文学作品を「伝承型」「戯曲型」「体験談型」の三つの叙述態度に分けた。そのうち、

「体験談型」には日記文学作品と源氏物語以降の物語が分類されたが、吉岡曠氏に源氏物語の語り手を主人公に仕えてその行動を見聞した人物と想定できるとする一連の論稿があり（『源氏物語の遠近法』、『文学』昭五二（一九七七）・四月など）、物語が「伝承型」「戯曲型」を経て「体験談型」に変化した過程と、それに日記文学作品が介在したという文章史上の見通しが新たに考えられてくる。

付記 本稿は平成五年九月四日に「名古屋・ことばのつどい」第

一四五回例会において発表した内容についてまとめたものである。その際出席された諸氏から有益なご教示を賜ることができた。感謝申し上げますとともに、それらを本稿に充分に反映できなかったことをお詫びしたい。